



W.A.Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第26号



放課後の自習

……モーツァルトへの手紙 その2

会員番号 K.618 加藤 明

W・A・モーツァルトに向き合うことは自己との向き合いと定義し、つどつどの文をしたためてきました。

外国人の貴方に日本語で考えてやってきましたが、「音楽」が媒介するモノログであり、やはり、「音楽」という時間芸術が赦す抽象思考の営みなのかもしれません。

モーツァルトさん、貴方ほどさりげなくて、朗らかで、すがしい音楽を知りません。

そして、いつどこで聴いても貴方ほど私のことを驚つかみする人もほかにはいません。

きっと貴方の形式美は完結しているようで完結しえないものであり、一定の形式からはみでるものだから……。

いや、はみでるものが貴方の思想だ、といえるのではないのでしょうか。

そんな貴方が戦前戦中は物語性の強いベートーベンを旗手とするロマン派の作曲家に圧されざりだつたのは、致し方ない真実だつたようですね。

過日、そのことを彼のあらえびす氏の昭和14年に出版された著書で再認識しました。

「あらえびす」(荒夷=荒々しい田舎武士のこと)という人を知る方も少なくなっていると思いますが、戦前に一世を風靡した《名曲決定

版》(中公文庫)で著名な西洋音楽の紹介者にしてレコード収集家であり、作家(野村胡堂の名で《銭形平次大捕物控》を著す)としても名の有る人物です。

あらえびすこと野村胡堂は明治15年に岩手県紫波町彦部という山村に生まれました。

現在その彦部地区に彼の記念館があり、少し前に訪問の機会を得ました。

記念館の入り口付近に野村胡堂の石碑があり、そこには生まれ故郷彦部地区への愛着の情と若くして東京に出て故郷を省みなかった忸怩たる思いがこめられており、昔の知識人特有の悲哀のこもった一種の責任感みたいなものが感じられたものでした。

「そこ」には無いものが東京という「あっち」にはあった。

しかし、己を育んだ「そこ」無くして己もなかった、という感慨の深さを思いました。



名曲決定盤 上巻
あらえびす著 中公文庫

「そこ」に無いものを我われは「あっち」という外側に、時として国外に求めるのでしょうか（日本の国自体がそうであったように）。

そうです、モーツァルトさん、貴方が故郷のザルツブルクを棄ててウィーンへ出家同然のジャンピングを果たした図式に、それはそっくりですね。

飛躍をお赦しただけならば、日本においても古くは西行も長明も兼好もそして芭蕉もみんな、「そこ」に無いものを「あっち」に求めたという意味で、小林秀雄に言わせると「人生の歩き方の達人」たちであり、こうした謂わばアウトサイダーたちこそが後世の我われの生きる標となっていることに気づかされもします。

今年の正月から二月いっぱいはいが人生にあって画期的なことがおきました。

「仕事」とい日常から離脱し、願ってもない「自由」を味わったからです。

振り返ると、とってもしエクサイティングな「自由」時間でありました。

会社を辞するというのはサラリーマンの宿命で、わかってはいたことですが、いざもう会社に用事がない、となると、それはそれ

は寂しいものでした。

モーツァルトさんとは正反対ですが、どこかでこの「会社」という共同幻想にいつまでもすがろうとする社会的自我が頭をもたげるのでした。

前述のように貴方は自ら雇い主のコロレド伯爵の縛りを解いて、ウィーンに打って出たわけですし、「そこ」・ザルツブルクから「あっち」・ウィーンで、新たにプロのミュージシャンとして独立独歩、自立を果たしたのですから。

遣り残したものがまだまだたくさんおありだったと拝察しておりますけれども……。

私のこれまでの人生を学校の時間割りに例えようと、ざっと40年が社会科の「授業」であり、この2ヶ月は「放課後の自習時間」みたいなものでした。

「放課後の自習時間」は会社という共同幻想から解かれたことによる寂寥感を漂わせるものでしたが、それでも「これから」のことを考えたり、今まで読もうとしていた本や聴こうとしていたCD、観ようとしていた絵や映画をあさる時間が生まれたことを素直に喜ぶほうが勝っていたようです。

この「放課後の自習時間」の収穫のひとつに、

大学コンソーシアムあきた
The consortium of universities in Akita
モーツァルト没後 220 周年
社会人講座 <2日間集中講義>

モーツァルトを 創った男

～ Mr. “K” と巡る 19 世紀ハプスブルク帝国の謎～

モーツァルトの曲に初めて通し番号を振り、番号の頭に振られた“K”の字で歴史に名前をとどめることとなったケツヘル(1800-1877)。彼は音楽をはじめ植物、動物、文学といった様々な分野に取り組んだ、何とアマチュアの研究者でした。モーツァルトが現在のような超有名作曲家になったのも、一つには彼の活躍があったため。ケツヘルが生きた19世紀ハプスブルク帝国の社会・文化・芸術を追いながら、この稀代のマルチ・タレントが生まれた謎に迫ります。



一月の末、普段兄のごとく慕っているH氏より紹介してもらって受講した、秋大コンソーシアム（ラテン語で「仲間」）主催による小宮正安氏の講義を二日間にわたり拝聴できたことが挙げられます。

テーマがなんと！「モーツァルトを創った男」という興味深いものでして、貴方のことを心底愛し、後世にきっちりとお伝えするべく貴方の遺産を分類・整理・統合した学究の徒であり、あの「モーツァルト全作品年代順主題目録」（1862年）を刊行したルートウイッヒ・フォン・ケッヒェルさんについての講義でした。

何気なくK何番ということで一般化しているKに秘められた謎が解明されていく知的なスリルを存分に味わうことができました。

そして、貴方を愛するあまたのモーツァルティアンがケッヒェルさんの恩恵に浴して、どんなに貴方を身近なものにすることができたか、そのことを貴方かお知りになったら、その完璧なまでの精緻な目録の編集とともに、さぞかし驚かれたことと拝察します。

またそんな2月のはじめ、偶然にも山田風太郎の「人間臨終図鑑」という出色の人生案内書に出会い、たまたま鴨長明の亡くなった年齢がいまの私と同じだったことから、かつて通読していた「方丈記」を再読玩味することになりました。

この「方丈記」は平安末期から鎌倉時代を生きた長明が五十歳を過ぎた晩年に書かれた一種のルポルタージュ風のエッセー。

有名なプロローグの《ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず》から、エピローグの《弥生のつごもりごろ、外山の庵にして、これをしるす》まで、原稿用紙20枚ほどの短い文章ながら、独自の無常観に貫かれたリアリティーに富んだ大変刺激的なものです。

二十歳代から三十代にかけて身に勃きた辻風（台風）、大飢饉、大火災、福原遷都、そし



て元暦の大地震と、立て続けに天変地異や人災が京の都を中心に襲っては人々を苦しめた様子が書かれているのです。

無常観に貫かれたリアリティーと書いたのは理由があるのです。

こうした長明を読み進んでいたら、今度の3.11の大地震が現実起きたのですから。

しかも、元暦の大地震に匹敵すると思われる千年に一度の大地震だったことが、小生を驚かせました。

さらに、福島原発問題も福原遷都に相似した人災と思われたし、長明の時代の就職難と今日の雇用環境の劣悪さも通じるものを感じたからでした。

この「方丈記」は鴨長明の壮大なる遺書のようにも思えました。

いわば己れへのレクイエム、鎮魂歌として読んでいました。

事実、長明は音楽的才能も豊かで、琵琶の達人だったらしく、生涯この楽器を方丈の庵（組み立て式の四畳半ばかりの庵）に持ち込んで、独り奏することしばしばだったらしいのです。

「方丈記」に展開する文章の独特なリズム感には音楽的にも秀でていた長明ならではのものかも、とその削ぎ落とし峻厳で美しい表現に強く撃たれました。

《・・・宝をつひやし、心を悩ます事は、すぐれてあぢきなくぞ侍る》と世の中をニヒルな眼

差しで見据えつつ、《・・・今の世のならひ、この身のありさま、ともなふべき人もなく、たのむべき奴（やつこ）もなし・・・》と孤独をうたい、《・・・世をのがれ、身を捨てしより、恨みもなく、恐れもなし。命は天運にまかせて、惜しまず、いとわず。・・・》と達観の境地を記す長明が3.11の千年に一度の大震災という不幸を機にますます身近な存在になったようでした。※すぐれてあぢきなくぞ侍る ⇒ この上なく無意味なことなのです

ところで、現在私は運よく再就職を果たし、3月から毎日20kmも離れている潟上市の天王というところまでマイカー通勤しています。

朝7時半には家を出てほぼ30分くらいのドライブ時間ですが、願ってもない早朝のリスニングタイムとなっています。

そんな五月、ようやく遅れていた田植えがはじまったころ、ジョージ・セルの指揮によるハイドンのシンフォニーを立て続けに10曲聴きました。

いささか古い録音ですが、クリーブランドの演奏はセルのあの歯切れのいい指揮のもとで生き生きとハイドンを謳っていました。

音楽が純粹に音楽として愉しめる至福感、簡潔なリズムとさわやかな和音が心地よく響いて春風とともに耳朶にそよぎました。

こんなにも棘のない音楽を味気ないと感じさせないことは凄いことかもしれません。

貴方が敬愛したハイドンパパには邪念のない遊び心がありますね。

考えてみると、ハイドンのシンフォニーの有名どころは殆ど貴方が天国に召された後にロンドンで書かれたものなのですが、ハイドンには貴方が先年書き残したエモーショナルなものが一切とっていいくらい分泌されていないのです。

ハイドンパパを聴きながら、貴方の三大シンフォニーとの比較をしてしまうのですが、お二人の曲想の違いを思いつつ、音楽というものの深さと面白さを味わいました。

こうして振り返ってみると、会社を退職し、「自習時間」を独り楽しみ、鴨長明を読み、五官を揺るがす東日本大震災に遇い、縁あって再就職を果たしたこの数ヶ月は正に目まぐるしいものでした。

この間、飽きることなく貴方の音楽に拘泥してきた私ですが、私にとってのモーツァルト経験は以前にも増して深まる様相を呈しているのです。

貴方への冷め遣らぬ感謝の念をお伝えしてペンを置きます。

end

伸びる芽を伸ばす

会員番号 K.10 畠山久雄

レオポルト・モーツァルトは息子の才能を見出し、伸びる芽を伸ばしました。

さて、熱心に吹奏楽を指導していた中学校の先生に、校長先生が『君が教えている子どもたちは音楽が得意な子どもたち、放置しても伸びる。君の本当の仕事は音楽嫌いの子どもたちを

音楽好きにさせることだ。』と指導したそうです。

校長先生は、子どもには全ての可能性がある！、子どもには公平に接しなければならない！、子どもが嫌がるのは不向きだからではない！、教育の力で嫌いなことを好きにさせられる！、弱点を克服して子どもは伸びる！、といった信念

があったのでしょうか。

この校長先生の信念は理想論で、そのようにありたいと願う気持ちは理解できます。

では、現実はどうでしょうか。野球大好き少年を音楽好きにさせるためには、教える側に膨大なエネルギーが必要、教わる少年にとっては大迷惑、いっそう嫌いになるかも知れません。

一般的に音楽が好きな子どもは芸術面の感受性が豊か、野球好きの子どもはスポーツ面の感受性が豊かです。感受性というのは伸びる芽であると考えられます。したがって、伸びる芽は伸ばしやすいのです。

教育現場では公平性を求められるようですが、小人も大人も感受性や能力は個人差が大きいと実感しています。冷たいようですが、感受性や能力が不足であれば努力は報われません。もちろん少しは上達するでしょうが、能力のある人には到底及ばないでしょう。社会は平等でなければなりません、個々の感受性や能力は極めて不平等であると実感しています。金太郎飴のように平等な教育は、あまりにも無策です。

ということは、伸びる芽を伸ばすことこそ、

子どもたちにとって幸せなことではありませんか。学校にだけにその責任を押しつけるつもりはありませんが、同じ方向に伸びる芽を持つ子供の集団を学校で教えることが、望ましい課外活動だと思います。校長先生の信念が、先生や子どもにストレスを及ぼし、伸びる芽を詰むことだけは避けたいものです。

ところで、勉強が好きではない子どもは昔も今もたくさんいます。そういう子どもがガキ大将になってリーダーシップを発揮したり、鉄棒が得意であったり、野球の名手であったり、ピアノが上手だったりします。そういう子どもは、勉強が出来る子どもより人気がありました。昔を振り返っていかがですか？少なくとも私はそう感じていました。

結びに、伸びる芽を伸ばすにもそれなりに努力が必要、途中で挫折も味わうでしょう。挫折を経験した子どもは、人に対し尊厳を持って接することや感動することが出来る大人になることでしょう。挫折を恐れて努力をしなかった子ども、あるいは努力させてもらえなかった子どもの将来には不安を感じます。

山上のモーツァルト

会員番号 K.475 川野義廣

かつて2年間（1999～2000年）、信州・松本に住んでいた。赴任して間もなく手にしたこの街の観光パンフレットには、『岳都』・『学都』・『楽都』の3つのキャッチフレーズが誇らしげに並んでいた。岳は北アルプスの玄関口として山岳観光都市を標榜し、学は信州大学を置く学問の街を、そして楽は音楽で芸術の街を謳い上げていたものだった。

ところで、ご存知の方も多いと思うが、松本は音楽の才能教育（スズキ・メソッド）で有名

な鈴木鎮一が、戦後間もなく活動の拠点を置いた地であり、小澤征爾が総監督を務める「サイトウ・キネン・フェスティバル」(SKF)も松本が本拠地である。夏の盛りの1ヶ月、安曇野の広がりにつながるこの街は、SKFのために国内外から駆けつける演奏家と熱心なファンで一層華やいだ空気につつまれる。オペラも上演される。1999年は、ベルリオーズの「ファウストの劫罰」を劇場（松本文化会館）と野外とで2度観ることができた。劇場での公演は舞台装

置のアツと驚くような仕掛けの場面展開に息を呑み、国宝・松本城の本丸庭園で上演された野外ステージでは、天守閣から闇を引き裂くようにバリトンの独唱が響いて来る奇想天外な演出に吃驚仰天した。なにもかも目新しい私のオペラ初体験だった。

ともあれ、桐朋学園で恩師・斉藤秀雄の薫陶を受けた小澤等が中心になって結成された「サイトウ・キネン・オーケストラ」(SKO)、それが活動の範囲を松本だけでなく、海外にも広げて高い評価を得ているのは知っていたとおり。そのSKOが母体となってスタートしたSKF松本は今年で20回目という。マエストロ・小澤は、「日本発、松本発の素晴らしい音楽祭を世界中の音楽ファンに聴いてほしい」と、今年から松本での公演終了後、海外で引っ越し公演を行うという。1回目は中国の北京と上海に決まったとか。

何にしても1地方都市からの発信であることは素晴らしいことだと思う。

閑話休題。私は山登りが趣味なので、松本での2年間は朝な夕な、標高3000m近くの山を仰ぎ見、実際にもせっせと登って充実した転勤生活を送ることができた。それに市内には山小屋経営者や関係者が住んでいて、こうした人々と接することができるのも嬉しいことの一つだった。なかでも、戦後間もない1948年、ほとんど徒手空拳で北穂高岳の頂上に山小屋を建てた小山義治氏との出会いは印象深い。氏は1919年(大正8年)生まれ、山小屋の経営者としては異色の東京(現八王子市)生まれの東京育ちである。蓄音器の時代からクラシック音楽で登山客を歓迎し、また山岳画を描くなど、山の世界では芸術家肌の主としてつとに知られた存在であった。

氏との出会いは、地元紙に氏の講演会と絵画展が同時開催される記事を目にしたのがきっかけである。当時は80歳を超していたと思う。山小屋の経営は息子さんに委ね、悠々自適の風

だった。

講演の内容は、生い立ち、招集を忌避した苦悩から逃げ込むように山へ傾倒し始め、やがて山小屋を建てるに至った経緯、そして音楽や絵画への念いなど、自伝そのものであったと思う。中で印象深かったのは、「世界には『アルプス交響曲』というのがあるのに日本にはない。誰も作らないなら私が誰かにお願いして作ってもらおうかと考えている」と話されたことだった。その時はいたく興味をそそられながら、音楽好きのいかにも氏らしい発想かなと受け止めたただけだったが、後年、氏の一徹な念いが遂に実現したことを知る。

2009年4月、購読している全国紙に、交響曲『北穂に寄せて』初演の記事が掲載されたのである。記事は要約すると、10年ほど前から浦田健次郎芸大教授に作曲を依頼。繰り返し手紙を送ってくる氏の熱意に打たれた浦田教授が2003年9月、それまで無縁だった登山に初挑戦して絶壁を背にして建つ山小屋を訪れ、曲のイメージを膨らませ、「壮大、雄大な曲をとという小山さんの希望を念頭に作曲した」こと。曲は2007年の年明けに完成したものの氏は演奏を聴くことのないまま同年4月24日に亡くなり、その後、浦田教授が演奏会を実現させるために奔走。指揮者の小林研一郎さんが快諾し、氏の3回忌である2009年4月24日、サントリーホールにおける日本フィルの定期演奏会で初めて披露されることが決まった、という中身だった。

では、演奏会当日の様子はどうだったのか。かつての職場の同僚に頼んで地元紙に掲載された記事(切り抜き)を送ってもらった。

記事は「ホルンなど金管でゆったり始まり、バイオリンなど弦楽器が徐々に盛り上げる様子は谷から山頂に霧が湧き上がるよう。終盤には小林さんの激しいタクトに合わせて打楽器がどろいた」と演奏の様子を、そして演奏終了後、作曲者の浦田教授がステージに上がり、約1,700人の観客の拍手に応えたこと、また氏の

息子さんが「山や音楽に情熱を傾けた父の生きざまを表すような曲だった」と、感動している様子を報じていた。氏が天界からこの日の一部始終をつぶさに眺め、そして待望久しかった楽の音に耳を澄ましていたに違いないと思うと、私もある種の感慨に打たれてしまう。

それにしても、と思う。氏の初志を貫徹してしまう意志の強さ、夢が実現するまでの努力と忍耐強さは正に信念の人である。素養の身のつけ方にも尋常ではない気骨を感じる。それは、絵画展で拝見した絵にも現れていたと思う。大胆にデフォルメされた構図と、その場・その時の心象風景が独特の色彩感覚で捉えられていて十分見応えがあった。

ちなみに、氏に絵を描くきっかけを与えてくれたのは、山小屋に客人として逗留した山岳絵画の第1人者・足立源一郎画伯である。画伯のスケッチに同行する中で芽生えた絵心が、画伯の画風とは異質の世界へ向ったのは、氏の独立独歩の精神性からして当然のことだったろうと思う。

なお、蛇足ではあるが、記念に1枚欲しかった私は、後日ご自宅へお邪魔して、氏お気に入りの作品を譲り受けている。

さて、結びはやはり我がモーツァルト氏にお出まし願わなければならないと思う。当広場の主宰者である加藤兄から原稿の依頼を受けた時、私の脳裏をよぎったのは、岳人として羨ましい人生を全うされた小川義治氏の魂がやどる北穂高小屋で、日本アルプス交響曲『北穂に寄せて』に聴き入ることだった。そして今、遅まきながらではあっても、間近に警咳に接することができた者の供養の気持ちとして、とっておきの『私のモーツァルト』を一緒に聴いていただきたいと思案しているところである。宿泊客の少ないオフシーズンに……。

[参考]

北穂高岳：北アルプス・槍ヶ岳～奥穂高岳の縦走路のほぼ中間地点に位置する。
標高3106mは国内では9番目の順位。

酒とモツの日々 (26)

「光陰矢のごとし」「歳月人を待たず」「人の噂も……」～等々。「時」をめぐる箴言が素直に受け止められるようになったのは何歳ぐらいの時だったのか。

TVの出演者がみな年下になり、まだ行っていない観光地が気になりだし、スポーツの勝敗より選手の健康の方が心配になり、棚にあるCDを全て聞き直す時間がもう無いことに嘆息をつくころ……「古い」は身近なものになっているのでしょうか。

「まだ有る」が「もう無い」に気付いた時、そしてそれが取り返しのつかないものであるとき、私たちの「いかに生きるか」を自問する時

会員番号 K.488 佐藤 滋

が来たのだと思います。自身の始末よりも残すもの、残される人への心配りが、大きく心の中心を占める時が訪れるのです。

モーツァルトの音楽も多くのを失いました。当時の響きも、演奏習慣も、楽器も今は全て残っていません。現代フルートの響き、オケのピッチや音量、工業技術の塊であるグランドピアノ等を聞いて、「これは僕の《音》ではない！」とモーツァルトは怒り出すかもしれません。けれども現代の私たちにとっては、いかに失われたものが多くても、モーツァルトが生み出してくれた「音楽」はかけがえのないものとして生き続けているのです。

何を失い、何が残るか。残るものが失うものより圧倒的に多いとき、作品は歴史に残り、後世の人々に愛されるのでしょうか。多くの研究者が18世紀の「音」を研究し、再現を試みているが、そこに「音楽」がなければ、一過性のものとして終わってしまいます。現に20世紀後半あれほど盛んだった古楽器演奏が、近頃はすっかり聴かれなくなりました。逆に今世紀に入ってから「癒し」「ヒーリング」の名のもとに「音楽」が過度の甘さと聴き易さに価値を求めすぎているようにも感じます。この傾向が行き過ぎて取り返しのつかなくなった時、彼は「これは僕の《音楽》ではない・・・」と嘆くのでしょうか。

秋田の酒造メーカーが「こめじるし」という新しい焼酎を創りました。「こめじるし」は米焼酎を、オーク樽貯蔵した米焼酎とブレンドしたものです。バーボンの風味を日本酒で楽しめる、と評判です。私も愛飲していますが、米の甘みを引き出し、焼酎に新しい価値を付加した素敵なお酒です。「米焼酎」にこだわるところが秋

田の良さ。焼酎といえば一般的には「芋焼酎」ですが、「芋」とはサトイモのこと。サツマイモを使うなら「諸」が正解。(ちなみにジャガイモは「薯」)「芋焼酎」は最初から、焼酎への敬意と愛情を放棄しているのです。秋田は、清酒と同様に米焼酎への誇りと、酒の魂を持ち続けているのが嬉しいです。近年、日本酒の消費は落ちていきますので様々な指向を意識して、「優しさ」「飲みやすさ」を強調した酒が出回っています。たとえ今を乗り切るための商品であっても酒造りの軸足は、しっかりと本来の場に踏みとどまって欲しいと願っています。

モーツァルトの演奏も、今後様々に変容してゆくことでしょう。「モーツァルト広場」は小さな団体ですが、モーツァルトの「音楽」を心から楽しみ、敬意と愛情を次代の愛好家へ伝えてゆく時が来ています。「広場」は人々が集うところ、そして何かを受け止め、またそれぞれの居場所へ持ち帰る出発点です。皆様は広場で何を見つけましたか？

事務局より

皆さまも記憶に新しいかと思いますが3月11日東日本大震災が発生、三陸沿岸を中心に多くの方が犠牲となり、今も不自由な生活をしております。私も数度被災地にてボランティア活動や物的支援、そして現在も物販の支援を行っております。皆様におかれましてもそれぞれのお立場でできることをされていらっしゃることでしょう。このたびの津波被害は100年に一度とも言われております。モーツァルトが生きていた時代から既に250年以上。

単純計算でも2度以上の大津波を受けたこととなります(実際記録によると三陸沖

では1896年(明治29年)、1933年(昭和8年)、そしてチリ地震(昭和35年)による大津波の被害を受けておりました)

秋田でも30年前に日本海中部地震による津波のため大きな被害を受けております。今後の世代が安心して暮らしていくためにもこの出来事、そして経験から得たことを後世に伝えることも大切だと思います。是非皆さま一人一人が発信し続けて欲しいと思う今日この頃です。

当広場と関係のない編集後記でスママセン・・・。(K.575)

モーツァルト広場ではいつでも会員を募っております(H23年6月現在108名)

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000(諸会費、別途)

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058
又は 本田(事務局) 080(1673)8322